

## ドイツの映画保存②

## デュッセルドルフ映画博物館

入江 良郎

Yoshiro Irie

連載:

フィルム・アーカイヴ  
の諸問題  
第39回

(承前)

1990年代に開館した市立のデュッセルドルフ映画博物館 (Filmmuseum der Landeshauptstadt Düsseldorf) は、ドイツ国内では新進の部類に属しているが、その原型となったデュッセルドルフ映画研究所 (Filminstitut der Landeshauptstadt Düsseldorf) の設立は1979年、さらにその前身である市立文化・青少年映画劇場 (Städtische Kultur- und Jugendfilm- bühne) がデュッセルドルフに関する歴史的な映画を集め始めたのは1956年であるから、一口に映画博物館といってもそれぞれがユニークな歴史の上に成立していることが判る (映画研究所が映画博物館 [常設展示] をオープンさせたのは1993年。1997年には組織名称を「映画博物館」に統一して現在に至る)<sup>1)</sup>。

4つの主要業務 (フィルム・コレクションの充実、フィルムメーカーの援助、映画の上映、映画文化の啓蒙) を掲げて発足した映画研究所の基盤となったのは、クラウス・W・イエーガーのコレクションである。イエーガーはその初代ヘッドも務めているが、地元コレクターのプライベートなコレクションを足がかりに公立文化施設が誕生するパターンは、やはりパウル・ザウアーレンダーのコレクションを基にドイツ映画博物館 (フランクフルト) が設立されたケースと同様であり、いずれも有力な観光地を拠点としているところからも、映画博物館の設置が各都市の文化行政にとって魅力的な事業となっていることが判る。常設展示の年間入場者数は約25,000人。企画展ではヒッチコックやムルナウ、オットマール・アンシュッツに関する展示を国内の映画博物館に巡回させてきた。

さて、我々はいく欧米の専門機関が、フィルム・アーカイヴが想定する業務の「全て」を、常に大規模かつ精密に実現しているというイメージを抱きがちであるが、実際には何かが遅れていたり、何かを切り捨てていることが少なく

ない。それでも我々は、むしろ「そこに実現されているもの」の成熟ぶりに憧れてしまうわけだし、また一機関の「不足」を他が補ってしまう懐の深さに嘆息するのだが、とりわけFIAFの外にあり我が国では馴染みの薄いデュッセルドルフ映画博物館のような新興アーカイヴのケースは、定員や予算、保存スペース等、我が国のアーカイヴにとっても身近な問題を考える上でも、あるいは逆にドイツ映画保存の層の厚みを知る上でも興味深い。

## 地域映画保存の拠点

ライン川のプロムナードに接する地上5階建ての建物は映画博物館のほかヘティエンス美術館=ドイツ陶磁器美術館 (Hetjens-Museum/Deutsches Keramikmuseum) を併合した複合施設である。2階から5階まで4フロアを常設展示に割り (計2,000m<sup>2</sup>)、2階には特別展示スペース (280m<sup>2</sup>) が設けられている<sup>2)</sup>。

1階の「ブラック・ボックス」 (130席) は可変速映写機などを備えたアーカイヴ仕様の上映スペースであるが、最大の売りは1929年当時の音色をそのままに再現するヴェルテ (無声映画用オルガン) である。同様に、ドイツ映画博物館にはウルリツァーが、ポツダム映画博物館にもヴェルテが設置されておりどこでも目玉となっているが、オーケストラ編成に代わり様々な管弦楽器、さらには列車や雷、嵐などの効果音までも再現するシネマ・オルガンはベルリ

ンやリュードスハイムの楽器博物館でも珍重されるコレクションとなっているもので、映画博物館の上映スペースは直にその演奏に触れることのできる貴重なスポットとなっているのである。しかし、上映設備そのものはプログラミング部門とともに1998年にリストラの対象となり、以来民間業者の運営に委ねられている。現在も博物館サイドの働きかけで展示に合わせた関連特集が組まれたり、ときには博物館による企画上映の会場として使用されているとはいえ、大きく後退を余儀なくされているのが現状である。ちなみに現在、館のメインスタッフは15名を数えている。

5階では図書閲覧業務も行なっているが、館の設計上専用の閲覧スペースが用意されていないため、予約制による細々とした公開体制のもと、その日の空席の職員用デスクが閲覧テーブルに早変わりするという苦心もある。そのオフィスに連なる映画関係資料用の収蔵庫は、実は映画博物館本来の企画展示室だった部分で (現在の企画展示は陶磁器美術館のスペースに相乗りする形をとったものである)、現在も図書やスチール写真、ポスターなどが運び込まれつつある最中であつた。資料の保存スペースは従来より市内数ヵ所の雑居ビルに散らばった状態で、今回の措置により漸くペーパー・コレクションの集約にはこぎ着けたものの、理想的な環境を求めてなおも努力を重ねているとのことであつた。

フィルム保存庫も同様に市内の雑居ビルに



デュッセルドルフ映画博物館外観

[表1]

2階:映画史のパンテオン フィルムカルト=キノカルト 映画館建築と移動映画館
3階:映画前史 撮影技術 映写技術 リアリティ=フィクション 空間=時間
4階:スタジオ訪問 無声映画・トーキー映画 映画と他の芸術 映画と資本・映画と政治 アニメーション・映画トリック 現代の神話
5階:色彩映画・立体映画 セルロイドから観客へ

[表2]

図書:13,000冊(逐次刊行物、オリジナル撮影台本を含む、独語と仏語が中心)
写真:200,000点
ポスター:20,000点
ドローイング:500点
衣裳:100点

あるが、ドイツ映画博物館もそうであったように、既存の建物(またはその一部)を保存施設として再利用する例はヨーロッパの公立アーカイヴでは決して珍しくはない。どこの国でも全ての機関がナショナル・アーカイヴ級の施設を建築することは容易ではないが、キャパシティそのものの不足に悩むところは稀であり、一度獲得したスペースには国際標準を確保するに必要な違いが出ることになる。同じコーナーではポスターや写真のようなグラフィックな素材の他に小さなキャラクター・グッズ、ヒッチコックのサインやサミュエル・フラーが残した葉巻の吸い殻までが陳列されている。これらを、映画館の歴史を写真資料などで紹介したコーナーや豊か

材に対し6°C、25%RH。とくに後者はノルトライン・ヴェストファーレン州では温湿度管理ができる初のフィルム保存庫というふれこみで、保存機能の整備は館のステイタスづくりに貢献する大きな要素となっている。ちなみにデュッセルドルフ映画博物館は同州内で視聴覚遺産のインデックス作成にもリーダー・シップを発揮するなど、まさに地域の映画保存の拠点として認知されている。

所蔵フィルムは約4,000タイトル。長篇劇映画(1,050タイトル)のほかにドキュメンタリー(2,350タイトル)、ニュース映画(100タイトル)、ホーム・ムービー(100タイトル)など、守備範囲は広い。古くはロシア・ゴスフィルムフォンドとの交換による約200本のソビエト映画などが含まれているところに歴史が刻まれているが、寄贈や寄託の制度が発達しているヨーロッパでは、コンスタントな収集予算を維持している例であり、これにも地域のフィルムメーカーを援助する意味合いが含まれている。

#### 映画資料の展示:デュッセルドルフの場合

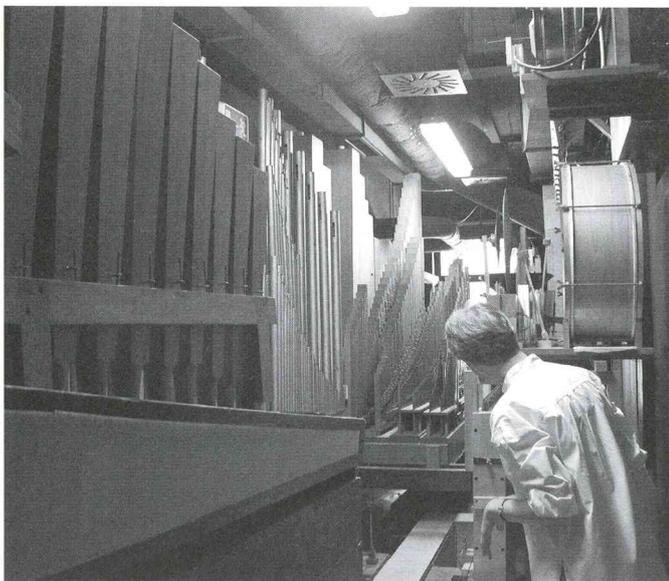
常設展示の内容は表1のように多岐にわたっているが、その最初のコーナーとなっている、映画作家やスターを顕彰する「パンテオン」もまた、「映画展示」の古典的なコンセプトの一つと言えよう。観客(映画ファン)の視点に立脚した展示構成は、デュッセルドルフ映画博物館の大きな特徴をなして、続く「フィルムカルト」のコーナーではマレーネ・デートリッヒやクラウス・キンスキーの衣裳とともに黒澤明の「夢」で使われた衣裳が飾られているのに驚かされるが、そうした衣裳の華やかなディスプレイ一つをとっても、映画製作の分業制をテーマにしたドイツ映画博物館の場合とは印象に大きな違いが出ることになる。同じコーナーではポスターや写真のようなグラフィックな素材の他に小さなキャラクター・グッズ、ヒッチコックのサインやサミュエル・フラーが残した葉巻の吸い殻までが陳列されている。これらを、映画館の歴史を写真資料などで紹介したコーナーや豊か

なプリシネマ・映画機材類の展示とともに眺めていくと、常設展全体にプライベートな映画コレクターの精神がしみわたっていることに気付く(ちなみに訪問時に開催されていた特別展[The Misfits: Nicht Gesellschaftsfähig]でも、有名なマグナム・フォトによる『荒馬と女』の写真展を軸にしなが、やはり地元コレクターの協力によりマリリン・モンローが表紙を飾った映画雑誌や死亡記事を掲載した当時の新聞、多数のモンロー・グッズが並んでいた)。それにしてもキネトスコープやシネマトグラフの展示はもちろん、ミュートスコープなら3台は並ぶというヨーロッパの機材展示の「常識」にはため息が出る。その「映画前史」のコーナーでは幻燈機のある風景を描いた絵画のコレクションも興味深く、また最後の影絵映画(Düsselnchen und die vier Jahreszeiten[1980])をデュッセルドルフで撮影したロッチェ・ライニガーにも特別なスペースが設けられている。ここでは多数の切り絵とともに、実際にライニガーが使っていたアニメーションの撮影台も見ることができる。

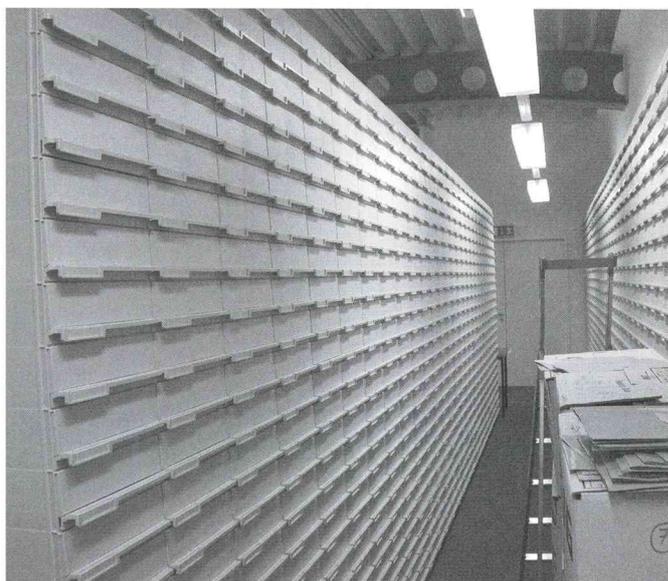
映画資料のコレクション数は表2の通り。衣裳にはR・W・ファスビンダー、W・ヘルツォーク、ウルリケ・オットインガーの作品で使われたものが含まれている。また上記のほかにもヴォルフガング・シュタウテを始め、ハリー・ピール、ヘルムート・コイトナー、マリー・デルシャフトのヘリテージ、さらにデュイスブルクを拠点とする配給会社アトラスの大型コレクションなどが博物館の「顔」を作り上げている。

#### 国内のグルーピングについて

ドイツを訪問して、フィルム・アーカイヴの多様性とそれぞれの豊かさに改めて感心しつつも、気になるのはそれらの相互関係についてである。事実、ドイツでは1本のフィルムにたどり着くまでにいくつものアーカイヴとコンタクトをとらなければならない、という皮肉も視察の途中、国の内外で耳にすることがあったが、映画保存に関わる多面的な事業を比較的小さな組織でカバーし合うこの国では、それらのグルーピ



「ブラック・ボックス」スクリーン裏に広がるシネマ・オルガン、ヴェルテのコンソール



企画展示室を改造して完成した資料用の収蔵庫

ングの問題は避けて通ることができない。

ドイツのフィルム・アーカイヴは現在、年に2回の統一ミーティングを開いているが(1回は幹部会議で1回は担当者レベルの専門部会)、これは元々ドイツ映画研究所(DIF)、ドイツ・キネマテーク、連邦資料館フィルムアルヒーフの3機関(いずれもFIAFおよびACE[欧州シネマテーク連合])に参加)が結成した全独キネマテーク連盟(Deutscher Kinematheksverbund)が発展したものである。この連盟が当初果たした役割については稿を改めるとして、それが「ディレクターのクラブ」的存在からプラクティカルなグルーピングへと形を整えたのは1993年のことであるが、それでもそれぞれの専門機関が「秘密主義の中に閉じこもっていた」10年前にはとても想像できなかったことであり、かつてはオークションで同種機関同士が値をつり上げるような弊害さえ見られたという。

現在はミュンヘン映画博物館、ドイツ映画博物館(以上はFIAF参加機関)、デュッセルドルフ映画博物館、ポツダム映画博物館の各アーカイヴの他に、シネグラフ(CineGraph-Hamburgisches Centrum für Filmforschung e.V./ハンブルク。映画調査の促進を業務とし、会議その他のイベントの開催、出版、調査プロジェクトのサポートなどを行なう)、F・W・ムルナウ財団(Friedrich-Wilhelm-Murnau-Stiftung/ヴァイスバーデン。戦前ドイツ映画の著作権を管理し、映画の復元に際しては予算上のサポートと復元バージョンの運用を行なうなどアーカイヴとの関係も密接である)、DEFA財団(DEFA-Stiftung/ベルリン。同様に、旧東ドイツのDEFA作品の著作権管理を行なう)のような主要な関連機関を加えた陣容で、大型のプロジェクトに方向性を与える役割を担っている。

そして現在は4つのワーキング・グループ(1. ナショナル・フィルモグラフィの作成、2. 映画復元、3. コレクションと展示、4. プログラミング)が発足しており、1の成果として1999年にはCD-ROM「ドイツ映画」(Die deutschen

Filme)が刊行されている。同CD-ROMは、1895年から1998年までの間に製作された長篇劇映画17,905タイトルを網羅したドイツ映画フィルモグラフィと、映画誕生百年を記念した連盟によるアンケートで選ばれたドイツ映画史上のベスト100(投票結果については本誌第30号を参照)の2つで構成されている。後者はもともと選定作品の救済をねらった一種の保存強化プロジェクトで、同時に成果の一環として各タイトル最低1本の良質なプリントをアクセス可能にするというもの。CD-ROM版では著作権の所在やプリントの入手先といった情報のほか、スチル写真やセット写真、ポスター、総譜、スクリプト、美術デザインの画像も収録されており、7つのアーカイヴ合同の関係資料カタログとして機能することも意図されている。

一方のドイツ映画フィルモグラフィは各タイトルの情報量にも限りがあり、今のところプロトタイプと呼ぶほうがふさわしいようである。全スタッフ、キャストのクレジットの記載はもちろん物語や批評の紹介も完備している「ベスト100」と比べると、多くが今後の継続的な作業に委ねられていることは確かで、「納得のいくレベルとは

およそかけ離れている」と苦笑するのは参加機関のアーキヴィストたちであるが、今回のCD-ROM刊行に限らず、成り立ちのさまざまな機関同士が一つの目標に向かって足並みを揃えていくことの難しさは当事者たちが最もよく理解しているところであり、むしろそこには、あくまで長期的なスパンで実りを上げようとする前向きな覚悟がうかがわれる。同じく複数のフィルム・アーカイヴを持つ国の一人として、今後注目していきたい。(次号に続く)

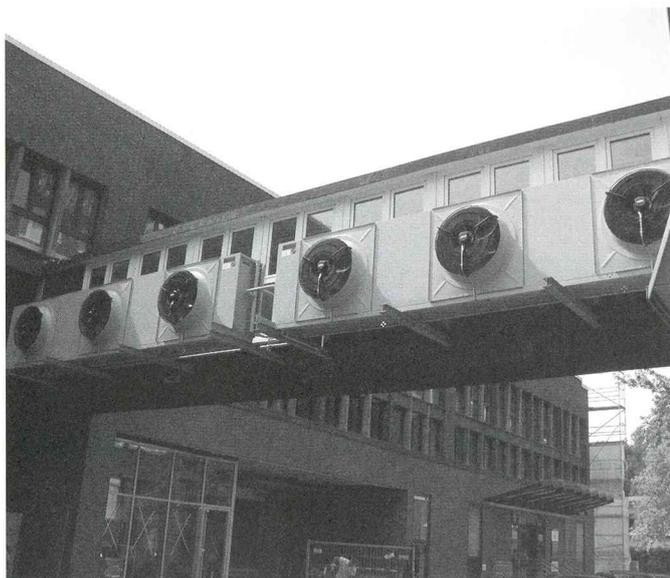
註

- 1 Filmmuseum der Landeshauptstadt Düsseldorf, Filminstitut der Landeshauptstadt Düsseldorfの直訳は「州都デュッセルドルフ映画博物館」、「州都デュッセルドルフ映画研究所」だが、本連載では「デュッセルドルフ映画博物館」、「デュッセルドルフ映画研究所」で統一する。
- 2 デュッセルドルフ映画博物館の入場料金は常設展示が6マルク≒339円。企画展示は8マルク≒453円(学生、子供料金はそれぞれの半額、家族チケットは倍額)。ガイド・ツアーは毎週水曜日の定期的な開催のほか、予約制で1グループあたり75マルク≒4,243円および来館者1名あたり3マルク≒170円。

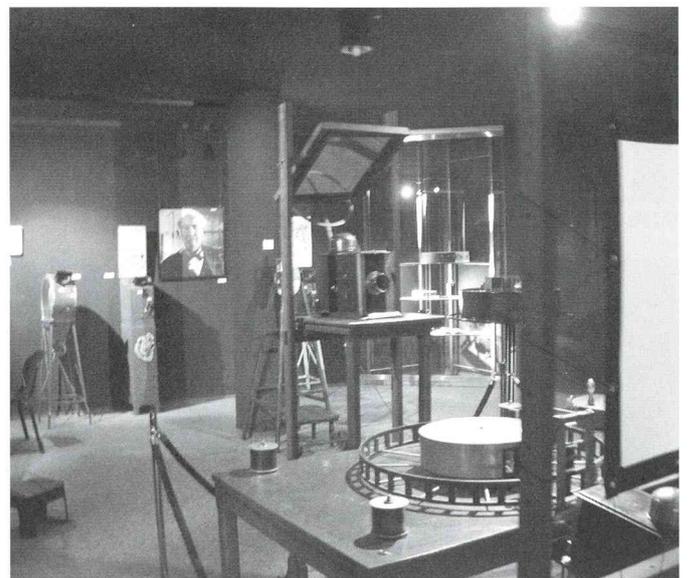
\* 人名・機関名等の片仮名表記、日本語訳については、足立ラベ加代氏(フンボルト大学日本文化研究センター)の協力を得た。



常設展示:「映画史のバンテオン」(2階)



フィルム保存庫のために追加された空調装置



常設展示:「映画前史」(3階)